

2018年度

帰国生入試 B方式

時間50分 100点満点

国語

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 実施時間は50分で、100点満点です。時間配分に注意して解答してください。
3. 解答は解答用紙にていねいに記入してください。
4. 解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
5. 試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
6. 私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 _____ 座席番号 _____

名 前 _____

聖学院高等学校

㊦ 次の1〜10のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 防災訓練でケイホウが鳴る。
- ② 服が部屋にサンランしている。
- ③ 雨のため試合がチュウダンした。
- ④ 新たな命のタンジヨウに感動する。
- ⑤ 時間がタンシユクされてうれしい。
- ⑥ テンジされた作品を見て回る。
- ⑦ 多くのシヨウガイを乗り越える。
- ⑧ 飛行機のモケイを組み立てる。
- ⑨ 身近な話題をテイキヨウする。
- ⑩ 外国から米や麦をユニユウする。

□ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(主人公である「作次」は幼いころから自分は電気で動く人間だと思い込んでいます。)() や。なども一字とします)

作次が、町の小学校へ通うようになって、まずなによりも困ったのは、自分の教室にプラグを差し込むコンセントがないことであつた。

コンセントがないと、電気が引けない。電気が引けなければ、自分を思うように動かすことができない。

せめて、隣の教室にでもあればと思つて、放課後、誰もいなくなつてから忍び込んで探してみたが、みつからなかつた。ついでに、廊下を探していると、用務員のおじさんが通りかかつて、落し物でも探しているのかといった。それで、思い切つてコンセントのありかを尋ねてみると、

「コンセント？ああ、電気の差し込みな。」

用務員さんはそういつて頷いてから、**①**訝しそうな顔をした。

「差し込みだら用務員室にもあるけど……なにをするのせ？」

自分の軀からだに電気を引くのだといつても、他人はわかってくれないにきまつているから、それには答えずに、

「ちよつと、みせでくれ。」

とだけ、作次はいつた。

用務員さんは、ちよつとの間、おかしな子だなという目の色で彼の顔と胸の名札を見比べていたが、やがて仕方なさそうに、

「んだら、一緒に来。」

といつて歩き出した。

そうして二人だけでゆつくり歩いてみると、町の入口の木橋よりも遙かに長い廊下であった。ただ長いばかりではなく、途中で直角に折れたりする。作次の電気コードは、伸ばそうと思えば際限もなく伸びそうだったが、ここは滅多に人の通らない山道とはちがつて、休み時間ともなれば大勢の生徒たちがぞろぞろと行き交う廊下である。こんなところに、朝から学校が終わるまで、長いコードを引きつ放しにして置くわけにはいかなだろう。誰かがそれに足を引っかけ転んだりするのは、こちらの知ったことではないにしても、その拍子に、用務員室のコンセントからプラグが抜けたり、コードが途中で引きちぎられたりしたら困る。困るところか、不意に電気がこなくなったら、こちらはその場で②往生する——それが給食のときだったら、たとえばスープの匙を口のすぐそばまで運んだところで、自習の時間だったら、前の席の女の子の頭に髪切虫をのつけようとしたままで、こちらは石地蔵のように動けなくなつて、ただ匙のスープがむなしく湯気を立て、指先の髪切虫が長い触角でいたずらに宙をままぐつっているだけなのだ。

一二つ目の角を折れたとき、つい、①絶望の溜息を洩らすと、

「どしたっ。」

と用務員さんが振り向いた。

「あんまり遠いすけ。」

「遠いか。」と用務員さんは独り合点で笑っていった。「一年生になったばかりは、誰でもそう思うのせ。なに、じきに馴れる。」なるほど、用務員室のコンクリートの※土間の、大きな※囲炉裏のむこうの柱の蔭に、コンセントがあった。まさかの時のために、コンセントのありかを一個所でも多く知っているのは心強い。作次は、ただそこにコンセントがあることを確かめるだけにすつもりだったが、その前にしゃがんでしまうと、やはりそこに自分のプラグを差し込んでみないではいられなくなった。そばに用務員さんがいることなど、忘れてしまった。

作次は、股座からプラグを取り出すと、それをしっかりと差し込んだ。途端に、まず下腹に微かな震動が起こり、それが軀の芯を伝って忽ち胸や頭や手足の先端までひろがった。新鮮な電流に揺さぶられて、軀のあらゆる器官が生き生きと躍動しはじめたのだ。いつものことながら、この一瞬の②作次は思わず目をつむって、うつとりとした。

「……なにしてら？」と、そのとき背後で用務員さんがいった。「お前、まさか、やらかすんじやあるまいな？」

作次はその声で我に返った。プラグを取り出すために股座など探っていたから、用務員さんは、そこにしゃがんだまま※用足しでもするつもりかと思っただろう。作次は、ゆっくりと腰を上げたが、それはべつに用務員さんの疑いを晴らすためではなくて、ともかくコードを伸ばしてみようと思ったからである。ここから一年生の教室までは随分距離があるから、あるいは

無駄骨になるかもしれないが、この際、自分のコードがどれだけ伸びるものかを試しておくのも悪くない。

作次は、ついさつきまで左手にしっかりと握り締めていた命の綱の乾電池を、そっと上着のポケットに仕舞った。それから、背中をまるくして、両手で股座からコードを手繰りだしながら、うしろ向きにそろそろと歩きはじめた。コードは床に密着させて、できるだけ直線に、けれども無理なく、余裕を持たせて伸ばさなければいけない。

不意に、尻がなにかにつかえて、肩越しに振り向いてみると、用務員さんが両目を剥くようにして見下している。尻が当たっている用務員さんの膝を、改めてちよつと押してやったが、動かないので、

「どいてくれ。」

と作次はいった。③電流のおかげで、ちつとも物怖じしなくなっている。それに、いつもよりずっと野太い声も出る。

用務員さんは、薄気味悪そうに道をあげたが、今度は前に廻つて、コードを踏んだ。作次は舌うちして、腰を伸ばした。

「邪魔しねえでくれ。」

「邪魔？ なんも、邪魔なんちよ、してねべさ。」

作次はまた舌うちすると、コードを振って波打たせてみせた。

「そこを踏んでいるべな。その足、どかしてくれ。」

用務員さんは自分の足をみて、それからゆっくり作次の顔に目を上げた。④につままれたようなというのは、こんな顔

のことをいうのだろう。それは無理もないことで、作次のプラグもコードも、他人にはみえない。用務員さんには、自分がコードを踏んでいることがわからないのだ。

「……お前、なにしてるんだ？」

と、用務員さんはコードを踏みつけたまま、情けないほど弱々しい声でいった、

⑤作次は、三度目の舌うちをした。プラグもコードも見えないのだから、用務員さんの目には、ただ尻から糸を紡ぎ出す蜘蛛を真似た単調な踊りでも踊っているように映ったのかもしれないが、作次にはそれを他人に説明する気など◎毛頭なかつた。

「どいてくれたら、どいてくれ。」

それが、ダンプカーで河原へ砂利を採りにくる髭面の男たちのような声になったので、用務員さんは足元から蛇が出たかのように飛び退いた。

作次は、ふたたび作業に熱中したが、案の定、用務員室を出てから十五メートルほど進んだところで、限界がきた。コードはまだまだ伸びそうだったが、最初の角を折れると、急にコンセントからプラグを外されやしないかという不安に胸を締めつけられて、息苦しくなったのである。作次は、最初から無理だと思っていたから、そう落胆もしなかった。片手にコードを巻き取りながら戻りかけると、すこし離れたところから見物していた用務員さんが自分から壁に背中を貼りつけた。

また柱の蔭のコンセントの前にしゃがんで、ポケットから乾電池を取り出し、それを左手にしっかりと握ってから、プラグを抜いた。途端に、軀のなかの快い震動が消え、手足がすこしだるくなったが、それは仕方のないことで、プラグと巻き取ったコードをまた股座へ押し込んで立ち上がると、囲炉裏のそばでぼんやりしている用務員さんに、

「ありがとう。」

と礼をいった。

用務員さんは、なんとも返事をしてくれなかった。目も口もまるくあけて、両手をだらりと脇わきに垂たれている。作次は、なにやら気の毒なになつて、つい、

「おらは、電気で動くもんだすけ。」

と、言わでものこを口にした。⑥用務員さんは、二、三度、大きな瞬またきをしたきりであった。

「んでも、おらはコンセントがなくても我慢がまんすらえ。こいつがあるすけ。」

作次はそういつて、左手の乾電池をちよつと指を開いてからみせてから、きのう担任の先生からおそわったように、電圧と一緒に衰おとろえた声をせいぜい張り上げて、

「おじさん。さようなら。」

とお辞儀じぎをした。

※土間^{どま}…家の中で床板を張らずに土を固めてある部分。

※囲炉裏^{いろり}…部屋の中で炊事や暖房のために火をたく所。

※用足し^{ようた}…大便や小便をすること。

問一　　〃〃〃①から③の文脈上の意味として、もっともふさわしいものを選びなさい。

①　訝しそうな顔

ア、疑問に思い怪しむ顔

イ、納得できず不満そうな顔

ウ、おかしくて面白がる顔

エ、嫌がつて迷惑そうな顔

②　往生する

ア、説明できなくなる

イ、困り果ててしまう

ウ、考えられなくなる

エ、動かなくなってしまう

③　毛頭なかった

ア、とても嫌だった

イ、苦痛でしかなかった

ウ、少しもなかった

エ、馬鹿馬鹿しかった

問二 ——線①について、「作次」が絶望の溜息を洩らす理由として、もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、コンセントのある場所がどこかわからず困っているのに、その場所を事務員さんが教えてくれないから。

イ、コンセントのある場所がとても遠くて、自分に付いている電気コードが切れてしまう等の問題が起こることが予想できたから。

ウ、コンセントのある場所にいつ着くのかわからず歩いているので、自分の中に蓄えてある電気がきれてしまうと思えたから。

エ、コンセントのある場所がとても遠くに感じられたので、一年生になったばかりの自分には歩けそうにないと考えたから。

問三 ②に入る言葉として、もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、頑張り、今でも覚えている

イ、不安感は、消え去ってしまう

ウ、ためらいは、忘れられない

エ、快感は、忘れられない

問四 ———線③について、「作次」がこのようになった理由を次のようにまとめました。①、②
それぞれ十字程度で書きなさい。

○ 作次は電流が①ことで、先ほどと違い②から。

問五 ④に入る言葉として、もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、牛 イ、鳥 ウ、猿 エ、狐

問六 ———線⑤について、この時の「作次」の心情として、もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、用務員さんが自分の言っていることを理解できずに気味悪がりこわがって弱々しい声になってしまったことで驚いている。

イ、用務員さんが自分に付いているコードを踏んでいるのに質問をしたり足をどかしてくれないからことでいらいらしている。

ウ、用務員さんに蜘蛛に似た踊りを踊っているように見える自分の行動の意味をわかってもらえないことで悲しんでいる。

エ、用務員さんに自分に付いているコードを見せたくてもできないことで、どうしたらいいのかわからず落ちこんでいる。

問七 — 線⑥について、この時の用務員さんの様子として、もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、用務員さんは「電気で動く」という気味の悪い少年作次とやっと思えることができると思ひ、ホッとしている。

イ、用務員さんは作次が今まで誰にも理解されずに生きてきたことをかわいそうに思ひ、泣きそうになっている。

ウ、用務員さんは作次の言動が理解できずにいたが、その上別れ際になり「自分は電気で動く」と聞かされてあつげにとられている。

エ、用務員さんは作次の言動の真意がわからずに戸惑っていたが、別れ際になりやっとその真意が理解でき温かく見守っている。

③ 次の文章を読み、後の問に答えなさい。(へや。なども一字とします)

『授業』ということばを聞いたとき、あなたはどんなものを連想しますか。こうたずねられたら、われわれはなんと答えるだろうか。「教師」「先生と生徒」「教室」「黒板」「教科書」「時間割」……。おそらくこんなふうな答が多いのではないか。このように、われわれは、「授業」というとある一定の「形」を思い浮かべてしまいがちだ。黒板の前に教師が立っている。彼の前には、大勢の生徒が机にむかって行儀ぎょうぎよくすわっている。教師が説明する。生徒はそれをじっと聞いている。ベルの合図とともに生徒の机の上にひろげられていたものがサツとかわる。教師の「独演」の内容もかわる……。伝統的な「一斉授業」いっせいにおける光景のひとつまである。

もちろん前章でみたように、一斉授業の枠内わくでも、ある程度の改革はできる。けれども、そこでは、本当の意味で学習者のイニシヤティブを尊重することはむずかしい。それらは、きめられた時間にきめられた勉強をしなければならない、という前提に立っての改革なのである。

しかし、われわれの多くが持つこうした授業のイメージとは非常に異なる「授業」がある。アメリカにおける新しい教育改革の動き、とくにカリフォルニア大学の※グッドラッドを中心とする動きのなかにみられるものがそれである。①「壁のない学校」かべなどもよばれている。

ここでは、教師が黒板の前に立って一方的に教授する、といったことはほとんどない。それだけでなく、子どもたちも、机の前ばかりにすわっていない。てんでに好き勝手なことをしているようにみえる。

②、ロスアンジェルス郊外のある小学校でのある日の「授業風景」はこうである。

四く六年生混合の上級クラス国語の授業。こういう時間の枠わくがあるところから、この学校はそれほど「急進的」でないことがわかる。――③、日本の授業とはかなり様子がちがう。教室の間の壁がたたまれ、二クラスが合同になる。机は五十、教師は三人もいる。これに対して生徒の数は十五、六名。生徒の年齢ねんれいはバラバラ。九歳から十一歳までの子どもがいっしょになっている。もつとも卒業するのは十二歳。九歳の子どもは、ここでいっしょにやっても卒業までにあと二年間別のクラスですこすことになる。

イヤホーンをつけて一人で熱心に何か聞いている子どももいる。二、三人でかたまつて本を読んだり、話しあったりしている者もいる。先生をかこんで質問中のグループもある。さまざまである。

教室のすみには小さな黒板があり、「図書館」「ディスカバリー・ルーム（発見室）」と書いてあるところに名札がぶらさがっている。のこりの子どもたちは、この名札のところをちらばっている。一人、二人と帰ってきては、また別の子どもが名札をかけて出ていく。

ディスカバリー・ルームでも、てんでに好きなことをやっている。ピアノをたたき子。大工仕事をする子。あるテーブルでは町のボランティア（奉仕者）の老人が、十人ほどの子どものグループに趣味の彫刻をおしえている。

④他の授業の時間もだいたいこんな調子である。

これで授業といえるのだろうか。子どもたちはちゃんと必要なことを学習しているのだろうか。おそらく読者の頭をそんな不安がかすめるのではなからうか。日本からこうした学校を見学に行ったひとびとの多くもそんな感想をもらすようだ。これが果たして授業だろうか、とたよりない感じがするそうだ。しかし、同時に、子どもが一時間近くも一人でじつと読みの学習

をつづけている姿に⑤感銘かんめいしたりもするそうだと。

さらに、興味深いことには、学校嫌きらいでサボリがちだった子どもが、このような「授業」には喜んで参加するということだ。「同じ年齢の子どもを一つの部屋に集め、時間割にしたがってつきつきとテーマをかえていく」形の「授業」では、どうにもついていけなかった子どもが、ここでは自分の力でちゃんと授業の内容についていっているのである。もちろん、彼らの進み方はのろい。しかし、彼らはもはや⑥「お荷物」でもなければ、クラスの「お客さま」でもない。自分の「能力」を発揮できる喜びに目をかがやかせている子どもの一人なのである。

このことはわれわれに何を問いかけているのだろうか。

「授業とはかくあるもの」というイメージに、われわれは固執こしつしてきすぎたのではないか。そして、その枠内でしか子どもの存在をみない傾向があったのではないか、こんな反省がわいてこよう。

筆者らは、なにも「壁のない学校」のやり方が万事理想的だ、といおうとしているのではない。しかし、「子どもの権利を大切に」、「子どもの主体性を尊重しよう」、素晴らしいながらも、実は従来の「授業」「学校」という枠内に子どもを「押しこめる」傾向が、われわれのなかになかっただろうか。「子どものため」といいながら、教師の創意工夫を一方的に子どもに「押しつけ」てこなかっただろうか。

従来の授業、すなわち一斉授業のやり方は、例の「チイチイパッパ」の童謡どうようによく代表されているといわれる。スズメの学校の先生が、ムチをふりふり、生徒のスズメにおしえるあの光景である。そこには、「怠なまけもの」の生徒を叱咤しつたげき激励している教師の姿が浮うかんでこよう。ここでは学習は受身の形でしか成立していない。

だが、われわれは、これまで繰り返し、子どもはそれほど怠けものではないことをみてきた。前章では、テストによるおどかしや賞罰しょうばつで強制しなくても、楽しく学習する子どもの例をみてきた。そこで本章では、その線ですらに話をすすめてみることにしよう。そのさいに、従来の授業や学校の観念にとらわれることなく、どのような学校教育のあり方が、子どもの持つ知的好奇心や向上心にこたえ、それをさらにのばすのに好ましいのか考えてみることにしよう。

まず第一に考えられるのは、学習者である子どものイニシヤティブをもっと尊重すべきではないか、ということだ。

考えてみると、⑦学校に行っている子どもというのは、実はあわれな存在である。サラリーマンでも、たいてい一定の範囲で仕事のやり方を裁量しうる。ときには急ぎの用事もあろうが、それでも「宿題」のように、一方的に強制されることはない。疲れたら一服することだってできるし、マイペースで働けばよい。※年次休暇きゅうかをとって遊びに行くこともゆるされる。つまり、成人の労働では内容についての若干の選択せんたくの可能性と、方法についてはかなり大きな自由度がみとめられている。もちろん、これらのゆるさされている程度は、職業により差が大きい。オートメ化された単純作業では内容や方法に自己選択の余地があるとはいいがたい。しかし、一般的にいえば、「※エコノミック・アニマル」と非難される「会社員」でも、学校における子どもよりはましなのではないか。

高校で多少の「選択性」が導入されるのを除けば、児童生徒のやるべきことは、その内容も方法も、他人によってきちんと定められている。朝の八時半ごろから午後の三時すぎまで、一定の時間間隔かんかくで、数種の教科がいやおうなしに与えられる。しかもそれを一定のきめられたしかたでつぎつぎ処理していかなければならない。授業が終われば、宿題がそれにかわって子どもの行動をコントロールする。したがわなければ、たちまち、落伍者らくごしやにされてしまう。そこには、学習者の側にほんのわずか

のイニシヤティブさえ、のこされていない。

こんな状態はどうみてもおかしい。子どもはそんなに怠けものではなかったはずだ。サルだってなんの強制をしなくても、組み立てパズルの解き方を学習したではないか。サルよりはるかに知的好奇心や向上心の強いといわれる人間の子どもになぜこんなに「強制」が必要なのか。子どもをもっと信用すべきではなからうか。⑧学習者である子どものイニシヤティブをもっと尊重すべきだ。

（波多野誼余夫・稲垣佳世子 『知的好奇心』）

※グッドドラッド：教育者。

※年次休暇：その年度の休み。

※エコノミック・アニマル：経済的な利益を一番重要だと考える人間に使われる言葉。

問一 —— 線①と反対の内容を表している言葉を文中から探して、四字でぬき出しなさい。

問二 —— 線②、に入る言葉の組み合わせとして、もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、 なぜなら たとえば

イ、 だから けれども

ウ、 たとえば けれども

エ、 つまり たとえば

問三 —— 線④にある指示語の内容をおさえて、このことをとおして筆者が伝えたい事柄が書かれている二文を文中から探して、その始まりの五字をぬき出しなさい。(この二文はつながっています)

問四 —— 線⑤の言葉の主語として、ふさわしいものを選びなさい。

ア、学校嫌いでサボりがちだった子ども

イ、日本からこうした学校を見学に行ったひとびと

ウ、一人でじっと読みの学習をつづけている姿

エ、読者の頭をそんな不安がかすめる

問五 —— 線⑥の説明として、もっともふさわしいものを選びなさい。

ア、厄介やっかいでも邪魔でもなく、クラスで特別扱いをすることもない。

イ、指示に従わないわけでもなく、クラスでおとなしくすることもない。

ウ、邪魔でもなく、クラスに居ても居なくてもよい存在でしかない。

エ、騒さわがしくするわけでもなく、クラスに溶けこめないわけではない。

問六 —— 線⑦について、このように筆者が述べる理由を文中の言葉を参考にして五〇字程度で書きなさい。

問七 本文の内容を次のようにまとめてみました。次の A B の入る言葉を文中から探して抜き出しなさい。

の下に書かれている字数にしなさい)

○ 日本と外国の学校教育の対比をして、日本で昔から行われている一斉授業が、子どもの A (二字) 性を損ねているのではないかと読者に投げかけています。今後は子供の B (五字) や伸びていこうという気持ちを受けとめ、子どものイニシヤティブを置き、学校教育を考えていかななくてはならないことを説いています。

問八 — 線⑧とありますが、子どもにイニシヤティブを持たせるような授業として、どのようなものがあるのかを考
え、二〇字程度で書きなさい。

三								二						一				
問八	問七	問六		問五	問四	問三	問二	問一	問七	問六	問五	問四		問三	問二	問一	⑥	①
	A											②	①			A		
																	⑦	②
	B															B		
																	⑧	③
																C		
																	⑨	④
																	⑩	⑤

受験番号
座席番号
名前

2018年度

帰国生入試B方式

国語・解答用紙

聖学院高等学校